



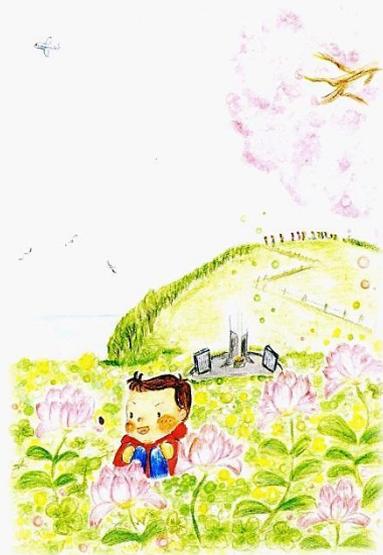
# きぼうのおか

～千年先のきみへ～

作・絵 しょうじょうじ

# きぼうのおか

～千年先のきみへ～



作・絵 しょうじしょうじ

とても天気の良い金ようび、  
ぼくはパパと、海の近くの公園で  
思いっきり遊んだ。  
パパはいつも仕事で忙しい。  
橋や道路を作っている。でも、  
今日はその分、お休みだ。  
ママと弟のだいちゃんは  
おかいもの。だいちゃんはまだ  
小さいから、いつもママと一緒に  
後でここに来るやくそくだ。

丘のてっぺんまでパパときょうそう。  
思いっきり走ったから、息がはあはあする。  
ぼくはパパと芝生にころり寝ころんだ。  
空を見たら、まあるいかたち。  
地球って、まあるいんだなあ。





「ひろくん！ パパー！」  
ママとだいちゃんだ。  
「ママー！ だいちゃん！ こっちだよー！」  
ママとだいちゃんがニコニコ走ってくる。  
ちいさいだいちゃんも、走るのが上手になったなあ。

突然、ゴゴゴ…という音が、地面の下から聞こえてきた。そしてすぐ、パパとママの電話から、キュイキュイと、びっくりするような音がなり出した。

「ひろくんーだいちゃんーこっちに来てー」

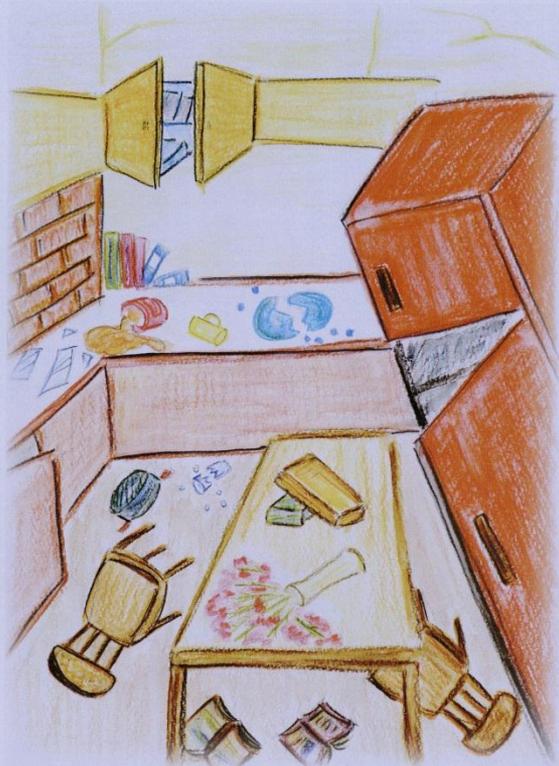
何が何だかわからなかったけど、ぼくはパパに、だいちゃんはママにしがみついた。するとすぐ、土の中で何かが大あばれしているように、ガタガタとゆれ始めた。

どれくらいこうしていたんだろう。地球が爆発するんじゃないかと、本気で思った。

「長かったわね。うちの中、大変なことになってるんじゃないかしら。」

「そっだな。いったん家に帰ってみよう。」





家の中はめちゃめちゃだった。タンスやたなは倒れ、お茶わんや花瓶はわれて、とてもぼくのうちは思えなかった。

「とっしょう…。」

ぼくがつぶやくと、またぐらぐらとゆれ始めた。

「じいちゃんとはあちゃん、大丈夫かなあ…。」

「パパとひろくんで、涙のじいちゃんの家の様子を見に行くぞ。ママとだいちちゃんは家にいるんだ。もし何かあったら、すぐに逃げるんだぞ。」

「わかったわ。いくら海沿いとはいっても、ここまで津波が来ることはないと思うけどね。」



はあはあした息をととのえて顔をあげると、真っ黒な水がものすごい速さで押しよせてくる。そして全部がのみこまれていく。野原も、川も、建物も、みんなみんな。  
「パパ！ねえ、どうするの？！どうしたらいいの？！」  
パパは、何も言わずじっとぼくたちの家の方を見つめていた。



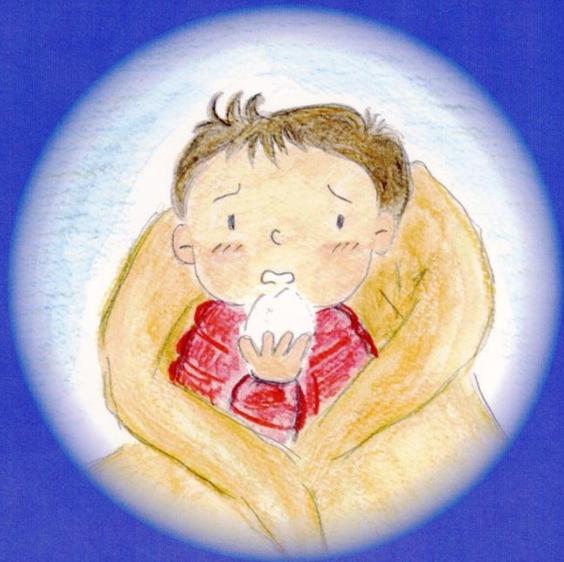
ぼくたちはすぐ浜のじいちゃんの家に向かった。じいちゃんの家は海の近く。車で庭に入ると、じいちゃんの車がない。犬のコロもない。  
「もう、避難所に行ったのかな？。そうだ！ラジオ！」  
パパが車のラジオをつける。緊張した声で、津波の話をしている。  
「大変だ！津波が来る！高台へ逃げるぞ！」  
そのまま車で走って逃げる。このへんに高台なんてないじゃないか。  
「そうだ！パパ！かけっこした丘へ逃げよう！」  
さっきかけっこした丘へ、パパと走って逃げる。さっきの何倍もの速さで丘にのぼる。

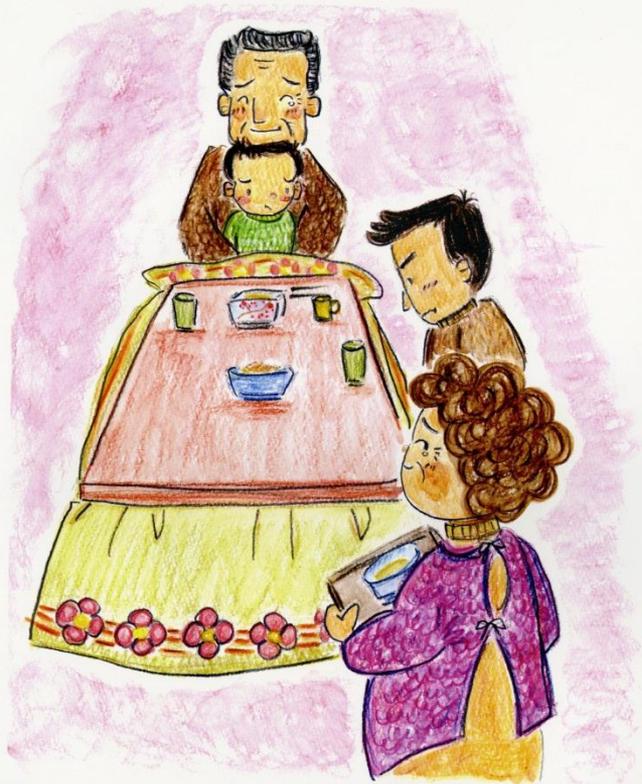
それからのことはよく覚えていない。  
制服を着たおじさんが船で迎えに来てくれて、  
大きな建物に送ってもらった。  
いつもならコンサートや劇をたのしむところだ。

そこで、パパとおにぎりをもらった。  
おなかはすいていなかったけど、  
おにぎりをくれたおばさんが  
優しくかったから、ちよつとだけ食べた。

目を開けていてもつぶつづいてても、  
同じくらい真っ暗な夜。  
ぼくは、青いシートの上で寝た。

ママとだいちちゃんどうしてるだろう…。





ぼくとパパは、山のじい  
ちゃんの家へ行くことにし  
た。もしかしたら、ママと  
だいちゃんも来てるかもし  
れない。

「ひろくん、パパ、大丈夫  
だった？ 痛いところはな  
い？」

山のじいちゃんとはあちゃ  
んは、ぼくを抱きしめ、あつ  
たかいおかゆを食べさせて  
くれた。体からほつと力が  
ぬけていく。

でも、ここにもママとだい  
ちゃんは来ていない。どこ  
に行ってるのだろうか？

あの日から、パパは毎日ママを探しに行く。ぼくは、ママとだいちゃんがいっしょ帰ってきてもいいようにお留守番。

ママ、ごはん食べられてるかな。寒くないかな。だいちゃん、ぐずってママを困らせてないかな。

山のじいちゃんの家に来て七日目のこと、パパが真っ白い顔で戻ってきた。あの日から、いつも疲れていたけど、もつともつと白い顔。

「ひろくん、よく聞いて。ママとだいちゃんが見つかった。

けれど、ママとだいちゃんは・・・お星さまになってしまった。」

「え、どうして・・・どうしてなの？」

「ママの車が見つかって、その中でだいちゃんとママが見つかったんだって。津波に飲み込まれたみたいだ・・・。」

「どうしよう・・・ねえ、パパ、どうしたらいいの?  
どうすればいいの?」

何がどうなったのか、どうしたらいいのか、  
頭の中がまっしろになった。

ぼくは、ただただ、パパの胸をたたくことしかできなかった。





ママとだいちやんがいなくなっ  
から、ぼくのころにはがっぼり  
と大きな穴あながあいてしまったみた  
いだ。  
じいちゃんも言う。

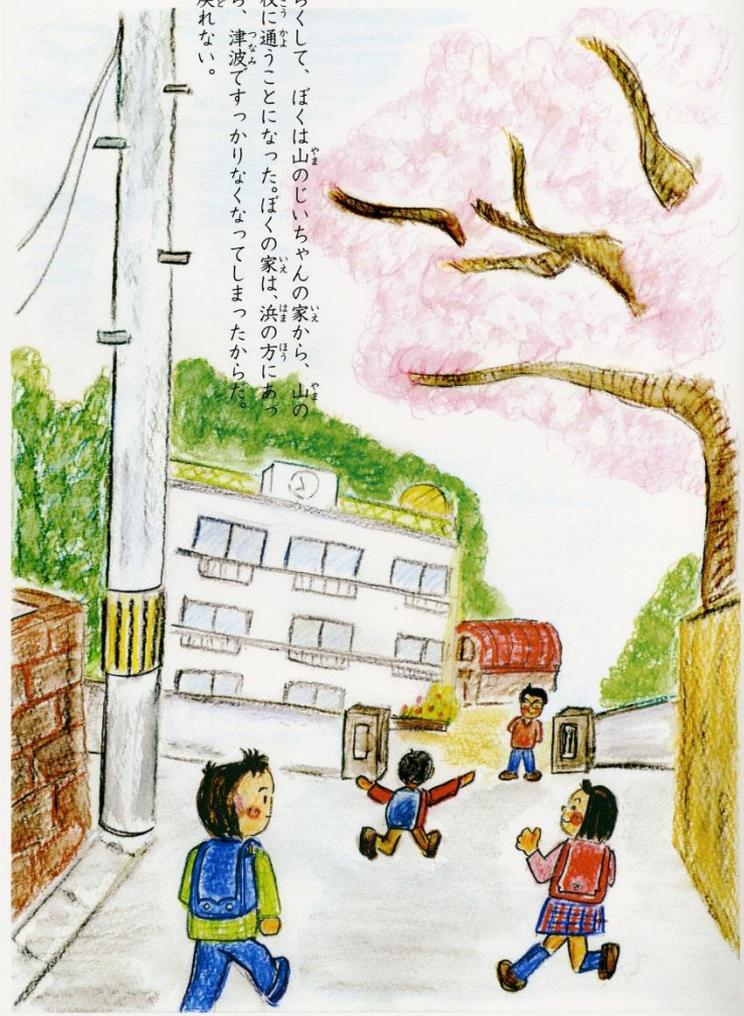
「泣ないてばかりいちゃ、ママも  
だいちやんも心配しんぱする。男おとこなん  
だから、泣なくんじゃないぞ。」

ばあちゃんも言う。

「これからは、だいちやんの分ぶん  
もひろくんが頑張がんばって生きるの  
よ。」

泣なかないで、だいちやんの分ぶんも生なま  
きてゆく……。ぼくはこれから、  
どうすればいいんだろう。

しばらくして、ぼくは山のじいちゃんの家から、山の  
小学校に通うことになった。ぼくの家は、浜の方にあっ  
たから、津波ですっかりなくなってしまったからだ。  
もう戻れない。



今まで通っていたあの小学校より、大きくて、いろんな子がいる。休み時間はみんなが遊んで遊ぶ決まりだ。ここではやっている遊びは、つなみごっこ。

「おおつなみけいほうです！みんなひなんしてください！」

「わー！こっちの家が流されたぞー！」

みんな、夢中でやっている。ぼくは、胸がざわざわして気持ちが悪くなる。やめてほしいけど、ことは出ない。

「さあ、校長先生が来たぞー！校長先生みんなのこと必ず助けけるからな！」

そんなとき、決まっていたのは、校長先生だ。校長先生は、つなみごっこをやっている友だちを、ひとりひとりおんぶで、式台の上まで運んでくれる。みんなキャッキヤとうれしそう。

そんなとき、少しだけ胸のざわざわが消えるような気がする。



帰りの準備をしていると、いつもつなみごっこをはりきってやっているりょうくんが、新しいペンケースをじまんにしてきた。

「いいだろ。モンスターペンケース、買ってもらったんだ。」

「いいなあ、かっこいいなあ！」

まわりの子もうらやましがる。

「うちのママが、地震のとき、うちの中のそうじの手伝いをがんばったからって、買ってくれたんだ。うちのママ、世界で一番やさしいんだぞ。」

それを聞いて、僕の胸が、カッと変わった。自分でもわからない、ぼくの気持ち。

「新しいのを買ってもらったからって、じまんしないでよ！それに、世界一やさしいって、だれが決めたんだよ！」

「なんだよ!?うちのママだもん、世界一に決まってるよ!?ひろくんのママ、津波で死んじゃったんだから、仕方ないだろ?！」

ぼくのしんぞうがドクンッともものすごい音をたてた。顔がカッとあつくなる。

でも、何ひとつことばにならなかった。



次の日も、休み時間になるとつなみごっこが始まる。

ぼくは、少しはなれて見ているだけ。

それなのに、校長先生は、ぼくをおんぶしに来る。

「さあ、校長先生が助けに来たからな！」

そういって、ぼくをおんぶする。ぼくは、こころがほっとして、そしてなぜか勇気がわいて、校長先生に話しかけた。

「校長先生、津波でしんじやうことは、仕方のないことなの？」

胸がどきどきした。今までだれにも聞けなかったことを聞いてしまった。



「・・・仕方のないことじゃないよ。」

いつになく、笑っていない、まじめな校長先生の顔。

「ひろくんも知っているとと思うんだけど、一度天国へ行くと、人は戻って来られない。それは、確かなことだ。でもね、津波で亡くなったことを、仕方のないこと、というのは・・・違うよね。」

ぼくは、うなずく。

「なくなっちゃったいのちを、未来のためにつなげていく、そんなことがこれからは大切なんじゃないかな・・・。」

校長先生が言っていることは、少しよくわからなかったけど、とてもしっかりと声だった。それに、「仕方のないこと」と、校長先生が思っていないくて、ぼくは安心した。

ある日、学校に博士が来た。

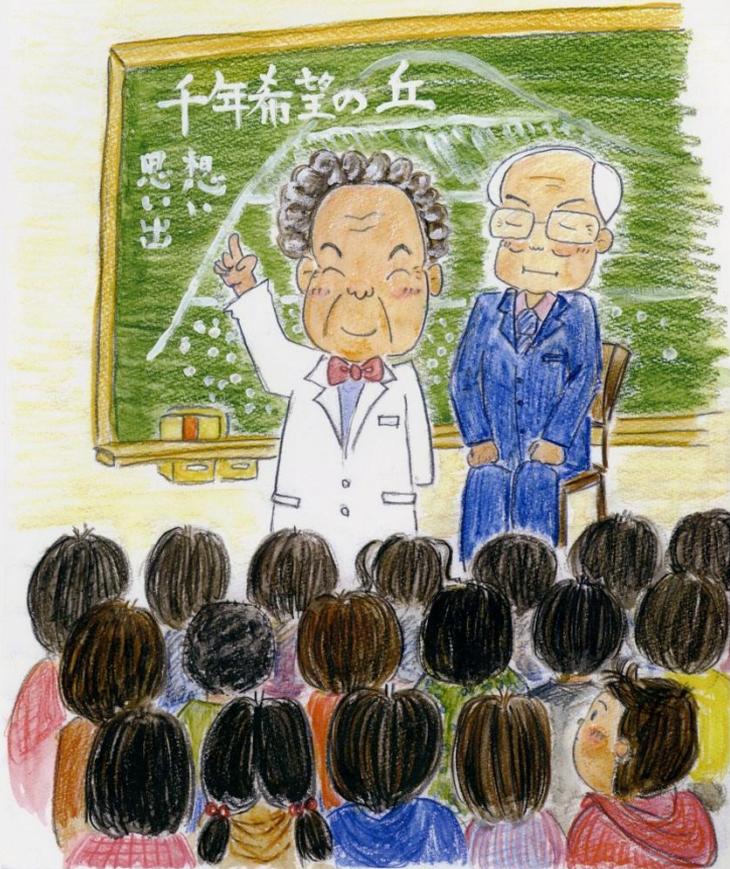
「みなさんのまちでは、津波がたくさんの方が亡くなりました。それは悲しいことです。この悲しみを繰り返さないように、このまちの市長さんは「千年希望の丘」という森の堤防を作ることになりました。私は、そのお手伝いに来たのです。」

森のていぼう？

「今までは、硬いコンクリートで波を防いでいましたが、森と海がとでも仲良しだということですが、この間の津波でよく分かったのです。いつもは森が海に栄養を与えてくれるし、海が怒って大暴れしたときは、森がそれをなだめて鎮めてくれるのです。そうすることで、みなさんのまちといのちを守ってくれるのです。」

森が、まちといのちを守る？

「それに、コンクリートでは百年くらいしかもちませんが、森の堤防は千年先まで守ってくれるのです。しかも、津波が来たときには、避難場所にもなるのです。今度、千年希望の丘に木を植える会があります。みなさんも、ぜひ参加してください。」



家に帰ってから、今日博士が話していた『千年希望の丘』のことを考えた。

千年先までまちやいのちを守ってくれる、と博士は言ったけど、ママやだいちゃんはいぼうを作っても戻ってこない……。

それなのに、なぜ木を植えなきゃならないのだろう……。

ふとんに入ってから、いろんなことが頭をぐるぐるめぐったが、しばらくすると眠くなった。





その夜、ぼくは夢を見た。

ママとだいちゃんが、にこにこ笑ってる。

「にいに、どうも、あんがと。」

最近覚えた、だいちゃんの『ありがと。』。

「ひろくん、毎日頑張ってるからいいわね。  
ママ、いつもひろくんのこと、見てい  
るからね。そして、この先何があっても、  
ひろくんの味方だからね。」

ママとだいちゃんは、ばいばいをしながら、  
ずっと向こうにある光の方へ歩いて  
いく。

ぼくは、走っておいかけ、ママにぎゅつ  
と抱きつきたかったけど、ただただ見送  
ることしかできなかった。



びっくりして、ぼくは目をさました。

「パパ・・・」となりて寝ていたパパをおこした。

「どうした、ひろくん。どうかしたのか？」

「パパ、ぼく、ママに会いたいよ。だいちゃんに会いたいよ・・・」

ぼくは夢の話をおぼした。

僕の目から涙があふれた。じいちゃんに「泣くんじゃないぞ」と言われて、ずっと出番がなかった、ぼくの涙。

「そうか、そうか。だいちゃんは、ひろくんの弟になれて、ひろくと遊べて、本当にうれしかったんだね。」

「そうなのかな・・・」

「そうだよ。だから『あんがと』だったんじゃないかな。だいちゃんは、自分のいのちを生きたんだよ。」

それなら、だいちゃんの分も、もうがんばらなくていいのかなあ・・・。

「パパ、泣いてるの？」

「うん。泣いてる。ひろくんも、泣きたいときはパパのところまで泣きな。パパのところで、ね。」

パパはそういいながら、ぼくをギュッと抱きしめた。ぼくの目から涙が流れる。気持ちらがほっとして、たくさんたくさん、涙があふれる。あったかい、ぼくの涙。

次の日ようび、ぼくは早起きして、パパのお仕事の現場まで行くことになった。  
ついでみると、そこには土の山があった。

「これ、なあに？」

「これは『千年希望の丘』だよ。今、パパが作っているんだ。」

『千年希望の丘』？ この間の、博士が言っていたやつだ。

「ひろくんは、津波のとき、丘に登って助かった  
たしろ？ これから、大きな地震がおきたと  
き、みんながここにのぼって津波から逃げる  
んだ。そして、この丘に木を植えて、この丘  
が津波を食い止めてくれるようにするんだ。」

「でも・・・これを作っても、ママたちは  
戻ってこないよ！」

思わず、ぼくは叫んだ。

「ひろくん。」パパがしつかりぼくの顔を見て、ゆっくり話した。  
「もし、ママがここにいたら、何て言うと思う？」  
「・・・丘を作って、木を植えて、みんなを守って、そう言うと思う。」  
「そうさ。パパも、時々ママに会いたくなる。話がしたくなる。  
そんなときは、『ママだったら、どうするかな。』って考えるんだ。  
そうすると、いつでもママがそばにいるような気持ちになるんだ。  
ころの中に、ママはいてくれる。」  
「そうなんだ・・・。」





「それに、ひろくんが大人になって、ママのような素敵な人と出会って、パパみたいなお父さんになったとき、その子どもたちが悲しい思いをしてもいいのかい？」

かんがえたこともなかった。ぼくが、パパに？

「パパ、やっぱり、木を植えたほうがいいと思う。」

「そうだろ？ それに、この土のなかには、みんなの思い出が詰まっているんだ。津波で流された家の、土台や、柱なんかがある。ひろくんのおうちも、入っているかもしれないよ。」

「そうなの？」

ぼくの家は、なくなっていなかった。丘になったんだ。ぼくのママは、天国へ行ったけど、こころの中にもいる。

だいちゃんは、自分のいのちを生きた。そう思うと、悲しい気持ちの中に、小さな勇気がわいた気がする。

「ぼく、この丘に木を植えてみたい。」  
「そうか、今度パパと植えに来よう。」

悲<sup>かな</sup>しい気持<sup>きもち</sup>ちは、  
なくな<sup>な</sup>ったわけ<sup>わけ</sup>じゃない。

けれど、ここ<sup>ここ</sup>に来て、  
少<sup>すこ</sup>しだけ  
がんば<sup>がんば</sup>れそう<sup>そう</sup>な気持<sup>きもち</sup>ちに  
な<sup>な</sup>った。

これが「きぼう」<sup>きぼう</sup>ってもの  
な<sup>な</sup>のかも<sup>かも</sup>しれ<sup>し</sup>ない、と  
ぼく<sup>ぼく</sup>は思<sup>おも</sup>った。







## 発行に寄せて

平成23年3月11日、日本は未曾有の大震災に見舞われました。多くの方が愛する家族や友人、思い出の詰まった我が家や地域を失いました。

この悲劇を二度と繰り返さないよう、岩沼市では「千年希望の丘」を創造しています。

「千年希望の丘」は、非常時には津波の威力を減衰させ、人々の避難場所としても機能する、命を守る森です。基礎は、震災で発生した震災廃棄物で築造されており、資源の有効活用だけでなく、「元は家や建物だったもの」を活用することで、大切な思い出の場所にも位置づけられています。また、平常時は防災教育や震災記憶の伝承の場としての役割も担うことになります。

この絵本を読みながら、「千年希望の丘」について子どもたちへ語り継いで、千年先まで子どもたちが笑顔で人々と共に安心して暮らしていけるよう、心から願っております。

岩沼市長 井口 経明



作・絵 しょうじしょうじ

制作・発行 岩 沼 市

平成26年5月 初版

